



大門のしめ縄。 色へのこだわり

日本では古くから、「わらじ」や「むしろ」など、わらを使った生活用具が使われてきました。しめ縄もその一つです。一説には、天照大神が再び「天の岩戸」に入らないように岩戸に張った縄が、しめ縄の始まりと言われています。

市北部の大門地区は、県内有数のしめ縄の産地です。市内で売られるしめ縄の約8割を生産しています。同地区の大門しめ縄組合には12軒の農家が所属。東海地方を中心に年間60万個を出荷しています。年末を控え、今まさに書き入れ時。作業場には出荷を待つしめ縄が次々と積み重ねられています。

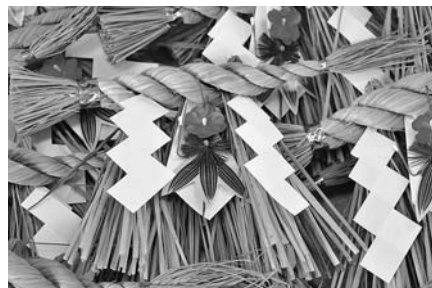
大門のしめ縄の特徴は、真新しい畳のような青色です。しかし、生産が始まった明治初期の頃は、米を収穫した後の稲わらを利用していたため、黄色に近い色合いでした。現在のような青々としたし

め縄を作るようになったのは、昭和30年代半ば。試験的に作った青いしめ縄が人気となり、それ以降、青色のしめ縄が主流となりました。「大門は青色のしめ縄のさきがけです」。藤江敏雄組合長の言葉に歴史と誇りを感じます。

鮮やかな青色の秘密は稲わら作りにあります。材料の稲は、しめ縄用として育てられ、米作りの3倍の肥料を与えます。刈り入れは夏場。稲穂が出る前の7月中旬〜8月中旬に行います。収穫後は変色しないよう乾燥機にかけ、冷暗所で保存します。作業の手間や苦労について藤江さんは「良い稲わらを収穫するには、米作りよりも細かな気遣いが必要です。水の管理、害虫対策はもちろん、傷が付かないよう、丁寧に刈り入れをします。手間は決して惜しみません」と話してくれました。

新年まで、あと1カ月となりました。「皆さんが良い年を迎えられますように」と願いを込めた大門のしめ縄。飾る際には、稲わらの新鮮な色と香りも楽しんでみてはいかがでしょうか。

農務課 公23◆6199



「よくわかま病気の話」

予防が肝心「急性冠症候群」

急性冠症候群は、不安定狭心症や急性心筋梗塞などの病気の総称で、心臓の筋肉に血液を供給している冠動脈に血栓が形成され、血流が急激に減少し心臓にダメージをきたす病気です。日本人の死亡原因の第2位である心臓病の中でも、特に生命の危機が差し迫っている重篤な状態です。

一般的な狭心症の症状は、胸の中央部（胸骨の裏側）に圧迫感、絞扼感（しめつけられるような痛み）、灼熱感（あつあつ感）が多くなり、さらに左肩、左腕、顎、歯などに痛みが広がることもあります。狭心症には安定狭心症と不安定狭心症があり、安定狭心症であれば症状は10分以内で治まり、ニトログリセリンをなめることで1、2分以内に症状が治まります。最近急に狭心症の症状が現れた、または発作の頻度が増した場合は不安定狭心症で、急性心筋梗塞になりやすい状態です。急性心筋梗塞は、

症状が30分以上続き、ニトログリセリンの効きが良くないことが特徴です。

急性冠症候群になってしまったら緊急に心臓カテーテル検査・治療あるいは心臓手術が必要となります。最近は検査・治療技術の進歩のおかげで治療成績はかなり良くなっていますが、急性冠症候群になる前に、予防することが肝心です。急性冠症候群になりやすい人は、高血圧、高脂血症、糖尿病などの動脈硬化の危険因子を持っていることがほとんどです。これらはいずれも生活習慣病ですので、日頃から『かかりつけ医』を持ち、生活習慣病の管理・治療をきちんと行っておきましょう。

岡崎市民病院 循環器内科

統括部長 田中 寿和

市民病院を受診する際は「かかりつけ医」の紹介状をお持ちください。